

人の如き瞑想の中に作畫した大ルツソーは貧困と孤獨の中に全身の中風に襲はれて、氣の狂つた妻の傍で死んだ。トロワイヨンもマリラーも發狂し、ドカンは一生涯自らを苦しめつづけ、ユエーは文字通り飢死し、ディアズでさへ貧困と肉體苦とに責められた。(ロマンローラン「ミレー」より)

今バルビゾン村の入口には石の上にルツソーとミレーのレリーフがある。

H、クルベエとドウミエ

暗い森の木立を洩れる白い光、薄暗い朝の氣配に谷川のせゝらぎが聞えてくる。私はモンペリエの美術館でクルベエのこのやうな繪を見たやうに記憶してゐる。この繪の中には

鬪争する鹿は見えないが暗さの中に散在する光が暗い畫面の奥行きを把握して一つの幻想を與へる。その幻想こそクルベエその人のやうな氣がする。白い光は森の外に到達した朝を告げてゐる。せゝらぎに交つてやがて麓の山影に石を割る音が森の奥迄にも反響するだらう。疲労から解放された工女は眠りから覺めて紡績の糸車も廻轉するだらう。パイプを吹へながら靜かにクルベエは水浴の裸女の盛り上がる太股の量感を冥想する。さうした一連の作品が今私の眼の底に浮んでくるのである。十九世紀のフランスの畫人の中で最も意識的に民衆の中に生活し仕事をした作家は誰であるかと問はれたならばミレー、クルベエ、ドウミエの三人であると私は躊躇なく答へるであらう。ミレーが聖フランシスのなぞを教觀を農民の現實の中に求めたとするならばクルベエは社會主義的なイデオロギーの中に藝術の革命を追求しようとし、ドウミエは反逆の呂律を手榴彈の如く當時の支配階級に投げつけることによつて勇敢に前進を續けた。クルベエは「現實をありのままに描く」と云ふ一つの主張を持つてゐた。彼はアングルの古典主義にもドラクロアの理想主義にも反對

した。

そして過去の偉大なる畫家に對しても彼らしい獨斷を以つて批判してゐた。チ、アンヤ、レオナルドを「僞騙者」ラファエルを無思想にし、しかもペロネーズを「強い剛直な男」として好んだ。彼の尊敬したのはホルバインやベラスケスでありレンブランを最も崇拜したと云ふ點に於て畫家として彼の寫實觀の系統が考へられる。彼の生れつきの自負心の強さは彼の藝術的野心といつても結び付いてゐるやうに見える。若し彼に判然した社會思想の自覺がなかつたならば彼は名譽心の強い單なる通俗作家として終つたかも知れぬ。正直にいふならば彼の繪の中には多くの通俗性を發見することが出来る。彼はその通俗性を技術によつて高め得る自信を持つてゐた。しかし場合によつて全く通俗に墮し切つた作品もある。大作の角力や風景畫の若干なものは私にそんな感じを與へた。勿論彼ばかりではない。ミレーにもコロにもマネーにもシャヴァンヌにもおやおやと思ふ程の通俗的なつまらない作品もある。美術史上に價値づけられる數枚の傑作があれば例へつまらない作品が多くあ

つたからとてとがめらるべきではない。

彼は腐敗しきつたアカデミーの官立サロンに對して劇しい憎惡を持つてゐた。當時のサロン程保守的であり、封建的であり、新しい個性的な作品に對して無理解なサロンはなかつた。王黨の宮廷畫家の多くが審査員をしてゐたから進歩的な藝術的な作家クルベエ、コロ、ドラクロア等は落選の憂目をいつも見なければならなかつた。クルベエは官展に對抗した獨立サロンの設立を目論んでゐた。しかし二月革命が起り共和政府が樹立された時だけは彼の作品は何の意義なく一八四八年のサロンに出陳され注目を引いた。

クルベエがブルードンと相識るやうになつてから彼の寫實主義主張は更に新しい世界觀を把握した。二月革命當時は進歩的な思想を持ちつゝも畫室の中に籠つてゐた彼の眼は社會革命の街路に配置され彼はいつの間にかラ・コンミュンの一黨員となつてゐた。

「單に一畫家としてのみではなく、人間として生きた藝術を爲すことが余の目的である」と云ふ彼の戰鬥的革命的 성격は畫室の一工人として満足し得ず政治的實踐に迄彼を飛び込

ましたのであつた。彼の不滅の大作「オーナンの埋葬」と「アトリエ」がサロンに落選した時、彼はサロンの對岸にバラックを建て、自作四十枚を以つて個人展覽會を開催唯一人で抵抗した話は餘りにも有名であつた。そのことは多くの批評家の攻撃を浴びた。そして彼が街の角々に公然とレアリズムの旗をかかげたことも彼が大衆といつてもあることも眞の意味に於て理解されなかつた。

彼の反逆が餘りに畫家として飛躍してゐた爲、彼は香具師の如く一部には考へられた。しかし彼はその時已に彼の藝術を眞に理解し得る數人の同志を持つてゐた。ユンゲは「オーナンの葬式」が數十年後に於てその價値が認めらるゝことを豫言した。一平民の死の祭禮を取り巻く壯重な地上と悲しき空こそ當時の平民の文化の象徴であつた。葬列の嗚咽の中に彼の抗議があるのだ。我々はルーヴルの十九世紀の室の中に同じ彼の大作「畫室」を見出す。彼自らが「七年間の藝術家生活の現實的譬喩」と題した如くこれは彼の生活の報告書である。彼の畫室に現はれるものはユダヤ人の骨董屋や道化役者や僧侶や淫賣婦に取

圍まれてゐる労働者、首つりの如く杭に絞れた人形模型、彼はその中央でコムテの風景畫を描いてゐる。羊飼ひの子供と裸女がそれを一所懸命見てゐる。子供の足元には眞白なアングラ猫がじやれてゐる。右手には密獵者と獵犬、左手の片隅には詩人ボードレールが本を讀んでゐる。シャンフルリーブルドン、プロマイエ等の藝術家や思想家等がある。混然たる組合はせの中に彼の畫家的思索は彼の寫實主義を完成へ導かうとする。

クルベエの寫實主義の素晴らしい價値を決定したものは「石を割る人」である。彼の物質に對する追求がこれ程成功を收めてゐる畫面はない。二人の労働者の破れたシャツに漲る白晝の光線、石を割る音が反響してくる。クルベエのマチエール（畫質）はかなり強靱である。繪具は驚く程厚塗である。筆と一緒にペインティング・ナイフが併用されてゐる。彼は又多くの風景を描いた。海、森、そして雪景色等が代表的なものである。驟雨のしぶきを受けた海岸に吠え狂ふ浪、森の中に鬭争する鹿、暴風の海、激浪にもまれてゐる船、雪中の鹿、彼はさうした特長ある畫因を追求した。彼の裸體は量感に對する彼の主張の爲

に描かれたやうに見える。そこには一つの感傷さもない。女の量感は物質的に把握されてゐる。

クルベエの寫實主義は官展からは恐怖をもつて拒絶され、世間からは誤解され嘲笑されつゝも彼は確信を持つ。「全世界の矢面に僕一人が立つてゐるのだ。」彼は千萬人といへども我行かんの勇氣に充滿してゐる。彼は六人か七人の彼の理解者である同志がやがて百萬を數へることを已に知つてゐる。社會主義者であり、民主主義者であり、革命黨員であることを彼は宣言する。彼はあらゆる民衆的な運動に加盟する。彼は一八七一年普佛戦争の時コンミュンの革命に参加し暴徒の手よりルーヴルの美術館を守ると共に軍國主義や侵略主義の象徴たるヴァンドームの圓柱を破壊した。ラ・コンミュンが巴里市を占領したのは三月十八日から五月二十八日の僅な期間であつた。彼は捕へられ、監禁され、ピリオリ、ルリエ等の十八名の指導者と共に軍法會議に附された。彼は六ヶ月の投獄と五百法の罰金に更にヴァンドームの圓柱破壊に對する償還金三十二萬三千法を科せられた。

一八七二年彼は再び自由の身になり二枚の作品をサロンに出品したが、サロンの官僚的審査員長メツソニエはサロンの不名譽を口實として彼の繪を再び拒絶した。審査員の中で只一人シャヴァンヌはその不法を怒り審査員を辭任してしまつた。クルベエ落選の理由は彼の藝術にあつたのではなく、彼がコミュニストであり囚人であつたと云ふ理由であつた。官僚的審査員達は法規的な口實によつて藝術の神聖と天才の藝術とを冒瀆し彼自身の良心を自ら辱めたのであつた。「豫言者は故郷に容れられず」敗殘の革命家は故郷オーナンにも迎へ容れられなかつた。オーナン市民は彼を國賊の如く遇し、市の噴水の上に建て、あつた彼の銅像は引き下された。

彼はゼネバ湖畔に逃避し孤獨の中に寂しく制作を續けた。その作品は二百點以上を算することが出来る。五十七歳、彼の病重しの報知が巴里に傳はるや國境を越えて彼の親友や昔の同志達は集つて來た。一八七四年十二月三十日の未明にレアリスト・クルベエはゼネバ湖畔に客死した。全歐洲の隅々から彼の友人や同志が續々と集つて彼の悲しき不幸なる

死は同志愛の心からなる哀悼に充たされた。アンリー・ロシュエフオーの涙の中の告別の辭は人々の嗚咽の中に消えて最後のアデューの言葉は遂に發せられず、かつて彼が「オーナの葬式」に描いた暗い聲なき墓穴の中に平民と同じやうに畫家クルベエの遺骸は葬られた。湖に續く寂寥たる丘、灰色の空と涙に濡れた同志達の沈痛な顔、これが人生の寫實主義者クルベエの最後に残した一大畫布の表情であつた。湖水は凍結した冬の表情④下に彼の墓への哀唱を秘めたとは云へ、亡命の沈黙の湖心にはかつてのコンミュンの嵐や血塗られたるペラシェーズの壁の弾痕がいつかは蘇つて來るのである。民衆の友クルベエが新しい記憶として民主日本の心に再認識される日の近いことを信じたい。

心から庶民であるドウミエの顔は眼が小さく鋭く、鼻先が上向きに尖つて口は上品であるが大きく、エスプリの充滿にいつも健康的に輝いてゐる。丁度それは彼の好んで描く庶民そつくりである。彼は町のミレーと呼ばれてゐる。市井の中に惡を打倒する正義の畫因

を彼は追求する。ミレーは重い木靴をはいて、野良の上に群る鳥の群を悲しい眼差しに眺める。クルベエはレアリズムのハンマーを振つて封建的な石塊を打ち壊はす。さて、彼ドウミエは陽氣な歌を歌ひながらピンセットと鋭い解剖刀で社會の汚れた臟腑の中からその隠匿されたる病原菌を摘發する。ルイ・フィリップの反動政府は彼の漫畫によつて倒れたとさへいはれる。

ドウミエの父デュアン・バプチスト・ドミエはマルセイユの一硝子工に過ぎなかつたが、彼は非常な讀書好きの知識人であり同時に詩人であつた。ドウミエは貧しいが實に幸福な良識のある家庭に育てられた。寡黙で社交に無關心で實名を嫌ふ地味な父の性格を受け継いだドウミエは同じ民衆の友であつてもその性格の點ではクルベエと全く反對であつた。こんなエピソードがある。普佛戦争の一ヶ月前ナポレオン三世は人心收攬の目的をもつて多くの有名で實力ある藝術家にレヂヨン・ドノール勳章を與へた。

ドウミエは當時貧乏の中に極度に落魄してゐたが彼は政府が彼に與へようとした勳章を

拒絶した。勳章を拒絶したのはクルベエとドウミエだけであつた。その直後偶然リラダンの停車場で二人は出會つたのであつたが勳章拒絶を直に政治闘争として誇張的にやるべきであつたと云ふクルベエの言葉に對してドウミエは不快な顔をしたと云ふ話である。「僕が勳章を受けなかつたのは受けたくなかつたからだ。僕はそれで充分満足なのだ。そのことは世間とは關係ないことだ」と彼はクルベエを詰るやうな調子で云つた。

グルベエの體質では勳章拒絶は政府に對する反抗として單なる彼自身の賣名以上に必要であつたし又それ故に無常痛快なる行動でもあつた。レアリストとしてクルベエとドウミエは共通したものを持つてはゐたがドウミエは地味であると同時に自分に對して甚だ潔癖であつた。喜劇はウィットとユーモアから生れるのであつて理論や努力からは生れない。畫壇のモリエールといはれるドウミエの位置が此處でもクルベエと或場合に於て對立的である。

ドウミエは本能的に政治や王様や封建性を憎惡してゐたのである。彼は一八三二年二十

四歳で「ガルガンチュア」を發表して一躍その存在を認められた。「ガルガンチュア」とは十六世紀フランスの作家ラヴレーがフランソア一世を諷刺した小説の主人公の名であつたが、ドウミエはその「王室費のパター」や「豫算の肉」を貪食するルイ・フィリップに表現したのであつた。

彼はその最初の漫畫によつて起訴され三百フランの罰金と六月禁錮に處せられた。彼の藝術家としての出發は投獄によつて開始せられたのである。しかし彼は屈しなかつた。控訴期間の若干な時日の間にもロジュランの匿名によつて戦ひ續けた。「政治的偏執狂患者」と題して検事總長ベルシル、陸軍大臣スウト・チエール等の政黨の巨頭を揶揄し、警視總監チヌケの三色旗を洗濯する姿を描いて反動政權に挑戦した。彼はその爲に最愛の兩親の面前から拘引されてサンペラチーの牢獄に叩き込まれた。ドウミエが入獄した時已に百二十人程の政治犯がゐた。すべてそれ等は共和主義者であつた。彼等は集團的に結束して獄内を占領し、毎夕獄庭に「夕の祈禱」に事寄せて示威運動を行つた。プロレタリアは獄

庭にフランス革命の三色旗を持ち出し、聲張り上げて革命歌を合唱し革命詩人の自由の頌歌を繰返す。「ラ・マルセイエーズ」の心の底から盛りあがる壯重な調子は眞の愛國者である青年ドウミエの心を打つのだつた。最初の入獄によつて青年ドウミエの一生は決定した。出獄後彼の意識は更に強靱になり彼の名聲は益々高まり彼は多くの肖像漫畫を描いた。彼は「ブルジョア國會議員肖像展覽會」のシリーズを発表し彼等の無智貪婪を曝露した。レンブランの影響を受けた彼は本格的な寫實主義を以つて漫畫を描いた。プロレタリア論壇の一欄を持つ民主主義新聞「ボン、サンヌ」は、街頭運動を賣子によつて執拗に展開しフィリップ反動政權打倒の爲に戦つた。それに相呼應して盛にドウミエも執筆してゐたがその「カリカチュア誌」は遂に發禁を命ぜられた。ドウミエの鋭鋒は暫時休止せざるを得なくなり彼は政治諷刺から風俗諷刺へと移り彼のヒューマニズムは人生批評の觀點から眺めた庶民生活の愛情へと轉化されたのだつた。「ロベール・マケール百一物語」の有名なシリーズが生れた。これはフィリップによつて創作された新しい「タルチュフ」で資本家、

政治家、科學者、商人、新聞記者、慈善家等がドウミエの辛辣な筆先にかゝつて巴里の庶民達を抱腹絶倒せしめた。ルイ・フィリップの政府の「民よ富めよ」のスローガンは遂に拜金主義の風潮を生み、あらゆる資本悪の跳梁した時代であつた。即ちブルジョア全盛の金儲け主義は欲の深い悪黨や一攫千金の空想家の言語道斷な行動となつてインチキが巴里を席捲した。マケールは實にそれ等詐欺師の典型なのである。マケールはドウミエとフィリップの合作であつた。フィリップは政論的ジャーナリストの天才として、その着想はドウミエ以上であつたが、漫畫自體として見るならば勿論ドウミエに遙に及ばなかつた。今日フィリップの着想かドウミエの着想かと云ふ問題が政治漫畫の上でかなり鑑別困難なものがあるとされてゐる。

しかし千八百三十五年から千八百四十八年二月革命に到る迄の漫畫全盛期はこの二人の活躍によつて巴里市民の血を湧かさしめたと云つて差支へない。ドウミエはフィリップと比較されるならば政治よりも人間、思想よりも情熱の人であつた。ドウミエは藝術家であ

つた故に風俗漫畫に於て彼のヒューマニズムを充分發揮し得たのであつた。彼は數點の油繪を漫畫と共に世に残した。後年「三等客車」や「洗濯女」は小品ではあるが不滅の傑作としていつ迄も民衆の藝術の美を我々に示すであらう。彼は民主主義者であつた。民主主義者なるが故に特權階級の卑俗なる利己主義と偽善に抗議し、彼の藝術を大衆の普遍的正義と愛の上に生かし得たのであつた。

千八百七十四年貧困のどん底にあつて偉大なる畫家ドウミエは已に老いてゐた。家賃の滞納によつて彼のリラダンの家は不幸なる藝術家の強制立退きを命じてゐた。二月二十八日はドウミエの誕生日であつた。

彼は親友コロから次のやうな手紙を受取つた。

「僕の老友よ、ヴテルモンドアの、リラダンの附近に僕は一軒の家を持つてゐたがその處分に困つたのでふと君に提供しようかといふ考へになり僕は公證人のところへ行つて君の名儀で登記して來た。だがこれは君の爲ではなく、君の家主をへこましてやりたかつた

からだよ」ドウミエはコロと對面するや涙を一杯眼にためてコロを抱き締めながら「コロ君僕が侮辱を感じないでかやうな贈物を貰へるのは君だけだよ」と云つた。コロ七十八歳、ドウミエは六十六歳であつた。

千八百七十八年ヴィクトル・ユーゴーを主催委員長として巴里でドウミエの個人展覽會が催された。その時ドウミエは七十歳、已に失明して筆を採ることが出來ず老妻と共にヴアルモンドアに隱棲の靜かな日を送つてゐたが、彼は友人の義舉に感泣し、就中彼は油繪がその個展に始めて認められて出品されたことを心から喜んだ。

彼はその翌年の二月七十一歳で腦溢血で死んだ。ヴォレ・デュックが十九世紀誌上で「ドウミエは民衆畫家である。暗黒でなくとも薄明の下に生活が營まれる民衆の世界にあつて、彼は生氣のある、思考する、人間的な偉大さを示した」といふ意味を述べた。

貧窮した老畫家の葬式に對してブルジョア政府は僅十二法の國費しか與へなかつたが、共和黨の諸新聞は代表を派遣し畫壇や文壇の舊友は續々と駆けつけ、ヴアルモンドアの小

譯は時ならぬ混雜を呈した。

「吾々には自分を慰めるためには藝術をもつてゐる。だが貧窮な彼等は何を持つてゐるだらうか」とモンマルトルの貧乏人を眺めながら或日友人に呟いたドウミエ。彼は無産者の味方であつた。(終)

枯葉抄

A、刑部の旗

私は楨の枯葉を採つて來ては丹念に寫生をした。楨の葉ばかりではない色々の枯葉や枯草を描くのが冬中の私の日課だつた。岩山の麓に沿うた小徑に楨の林があつた。風が吹くとその枯葉はからからと音を立てた。葉の二三枚ついた小さな枝を手折つて私は陽の光にかざして見た。枯葉の形は何物かを招く手のやうにも感じたし、又、はためいてゐる旗のやうにも思はれた。繪に描いて見ると一層そんな感じがした。

枯葉あまた冬にも散らす

細枝の先にしがみて

枯葉抄

あらたなる春陽にうつる

げに槇の枯葉はうれしきかな

をちこちの野はあさみどり

さきがけの春にゆすれて

その枯葉

からからと鈴打ちふれり。

私はこんな詩を書いて友人に送った。始め枯葉を描いたことは意味があつたわけではなかつたが枯葉や枯草の寫生は私としては非常に出来が良かった。私の住んでゐた土地は非常に寒く戸外の寫生には不適當だつたので、自然冬は家内に籠りながら目的もなく色々のものを描いた。私は本草的に出来るだけ細密に描くことを努力した。枯葉はその畫因の中心だつたので興味がだんだん劇しくなつた。この地方は植物の種類が非常が多いので色々の枯葉や枯草が集つた。私はそれ等を集めに岩山の崖に沿うた小徑を歩きながら物色した。

枯葉や枯草は大抵冬は雪に埋まつて、その一部分が雪の中からはみ出してゐた。三角形の葉、楕圓形の葉、大きな葉、小さな葉の集合したもの、黒くひからびたもの、しぼんだもの、蔓のやうにくねつたもの、細くすがれたもの、繊維だけのものといふ風に、色とりどりの枯葉や枯草で、机の上が一杯になつた。すると、私はかうやつて枯葉ばかり集めてゐる自分の姿が何か意味を持つてゐるやうに思はれた。戦時中の敗北主義者私は雪の底から枯葉を探してゐる。そしてその枯葉を一所懸命にといふよりは病的な愛情をも持つて描いてゐる。私は自分のわびしさを消極的ではあるが枯葉を描くことによつて抗議してやらうかなぞと考へた。すると枯葉の様々な形態が私自身の姿の如く思はれた。そして山全體の枯葉が皆自分の肉親の如く考へられた。枯葉や枯草を持つた山や野が憂鬱な冬空の下に蔽はれて延々と續いてゐる。

雪の下に埋もれた枯葉

私は雪をとりのけて

枯葉抄

その枯葉の濕つた吐息をもう一度光の中に放つ

灰色の空の冷たい光が枯葉を透きとほす時

私は枯葉のついた枝を光の中に打ち振る

戀人よ（そんなものは居ないのだが）

雪の上で枯葉を旗のやうに振つてゐる私の姿が君に見えるだらうか？

雪の山が向ふにも續いてゐる、枯葉を一つばいかくしながら。

私は枯葉を描きながら私の心に云ひ聞かせるやうにそんな詩を書いてゐた。

春が来て雪が解け始めた。岩山の麓に沿うた小徑の邊りに枯葉の底を探すと落の臺が緑色に萌えてゐた。雲が山頂をゆるやかに動き始め、枯草に春の陽ざしがぬるんでゐる。

楨の林には頬白の群が枝から枝へ飛びはねてゐる。茶褐色の楨の枯葉は冬にも散らずに細い枝の先に無数にしがみついて、春の風からからと鳴つてゐる。

戦時中の心境を聞かれたら「私は枯葉」だと素直に答へるだらう。或は白髪のやうにすがれて岩にしがみつきたながら風に吹かれてゐる一本の枯草だつたとも云へるだらう。繊維だけになつた病葉だつたのかも知れない。私は李朝の黒い壺に澤山の薄葉の枯葉や枯草をさしてゐた。その灰茶色の生花は實に美しい魅力を與へた。古流の活花の師匠をしてゐる友人の三上君はその美に驚嘆して、本格的に枯枝を扱つて活花を試みた。私の枯葉や枯草の繪はあちらからもこちらからも所望された。

この枯葉の繪の心境は仲々品も良かったので人々から愛された。人々の中にもこれに共感するものがきつとあつたからに違ひない。

「旅に病んで夢は枯野をかけ巡る」何かさうした絶望的な美しさが私の身邊を包んでゐた。

明日愈々戦國と云ふ前の晩、兵隊達は酒を飲んで「枯すゝき」の歌を歌つてゐた。「どうせ二人はこの世では花の咲かない枯すゝき」「誰が軍歌など歌へるものか」……

私は細い面相の筆先で出来るだけ細い線で枯葉達を描寫した。枯葉の中に傷き敗れ折れ腐れたものも多かつた。何か繪を一つと云はれて私はいつもその枯葉の繪を渡した。今では私の枯葉の繪を持つてゐる人があつちにもこつちにもある。

B、スタンランの繪

私の東京の家の應接間には長い間三つの石版畫が掛けてあつた。グロスとスタンランとコルウイツツの三枚であつた。グロスの繪は病んだ失業者を描いたもので、今から見るとぶくぶくとむくんだ榮養失調者の感じである。大變氣味の悪い繪で友人達は「何故あんな繪を掛けるのだ」といつも私に抗議した。自分でもグロスのレアリズムの物凄さに怖氣を

感じないでもなかつた。私は子供が病氣した時にその繪を外した。スタンランの繪は前歐洲大戰に一人の尼僧が無数の戦災孤兒を伴つて避難する場面を描いたもので全く反戰的なものであつた。一人の尼僧が懷ろに乳兒を抱きながら前方に向つて歩いて來る姿が中心に描かれてゐる。尼僧の周圍や後方には無数の戦災孤兒達が群がつて來る。兄の肩車にしっかりとつかまつてゐる幼兒のいたいたしい姿も見える。おくれては大變だと氣をもみながら小走りに駆けて來る子供もゐる。後から押されながら放心したやうな顔をして無意識に疲れた足を引きすつて來る子供もゐる。黙々と悲しさに土を踏んで來る子供もゐる。尼僧の顔は悲哀と嚴しい決意を示してゐる。後方に漚しなく續く子供の大群、空は絶望の荒蕪しい表情にその子供達を追ひ立てゝゐる。この繪は戦時中その基督教主義の信仰の爲に毅然として反戰主義を持ち續けた老教育家たる私の尊敬する河井道子先生に終戰の記念として呈上した。もう一つのケーテコルウイツツの繪は二人の餓ゑたる子供達と母親が仰向き加減に同一の方向を見てゐる圖である。

母の腕は幼い方の子供を抱いてゐるのだらう。疲れ果てた眼に映るのは崩れた壁であらうか？ 壊れた玻璃戸だらうか？ 空の雲だらうか？ これ等の繪は前歐洲大戰當時に反戦主義の藝術家達によつて描かれたものであつた。

これは當時のヨーロッパの悲しい姿として我々は眺めて來た。しかしそれはいつか今日の日本の姿として我々の現實の前に行はれたのであつた。

一家十一人、二人の老母と六人の子供を抱へて妻と妹を連れながら疎開する途中で私はふとそれ等の繪を思ひ出した。思想彈壓の暴力が狂人の様に荒れ廻つた時、私の友人知己の間に多くの犠牲者を生んだ。私は注意を受け、自分では何でもなかつたのだが周囲の人が思はぬ不幸を受けたので、最悪の場合を考へてそれ等の繪を人の眼にふれぬ處へ片付けて未だ帝都が空襲にならぬ前に疎開した。戦争の始まつた當時は私もまふと政府の聖戦に欺かれたが次第にその内容や上層部の腐敗が解り始めると共にこの戦争の本質が全く歴史的過程に於ける帝國主義戦争であり、小市民やインテリがファシズムに轉落すると云

ふ豫想的の中したことを自らの反省に於て知つた。私の友人達は日本の必然の運命をお互に認識するやうになり、出来るなら「この馬鹿げた戦争には死にたくない」と考へるやうになつた。だが我々は何も彼も奪はれ手も足も出ない状態に去勢されてゐたから眞理を主張する自由も勇氣もなかつた。私は陸軍が私に命じた紙芝居の仕事も嫌でたまらなかつたし、支那派遣の話も非常に迷惑だつたので病身と云ふ理由で斷り、老人や子供を連れて田舎へ匆々引込んでしまつた。どつちにしても卑怯な話なのだが私とその本質を知つたときに私は自分の思想と戦争と云ふ現實の中に二重の憂鬱を感じたのだつた。戦争の始めこの戦争が大衆の利益の方向に向ふものではないかと考へたり又この戦争が國內的な革新に轉化し得ると錯覺したのは私ばかりではなかつた。我々は全く大東亞共榮圏の理念や東洋の平和や民族の自立の美名に一杯喰はされたのだ。私は田舎へ引込んで最低の生活が保證されるならば純粹に自分の仕事に専念すべきだと考へた。厳しい試練の現實を仕事の上に逆に生かすことは疎開の積極性でもあつた。その中に私は一つの抜け道を切り開いた。戦

異中私は幸にもその仕事を繼續させ澤山の得る所があつた。

C、子等熊笹をかつぎけり

岡山縣北部の姫新線の沿線、丁度新見と中國勝山の中間の一山驛が私の住んでゐる刑部町である。私の假寓は驛のホームの前の汚ない二軒長屋の一隅である。一家十一人が狭い所にひしめき住んで來たのである。備中一の高山海拔三千二百尺の大佐山麓、氣候は丁度輕井澤に似てゐるといはれる。寒い土地で風景は寧ろ山陰に近い。陽明學の儒者山田方谷の終焉の地で私の女房の少女時代を遇した土地である。町と云つても寧ろ村に近い寂しいところだが、町の人々から親切にされたので疎閑者としての鬱めさはなかつた。この盆地

の向ひ合つた山麓に小さな祠があり、それぞれの鳥居の様式が水邊にある嚴島神社の鳥居と共通してゐたり、地質學的にも元此處が湖心だつたといふ話などを興味深く聞く中に湖底に住んでゐる魚のやうな自分を想像したりした。私は廿年以上私の心の底に巢を喰つてゐるベシミズムが一つの安息をその湖心に見出したやうな氣もした。近くに澤山古墳があつて埴輪や曲玉、劍などが時々發掘される。天孫族と出雲族の交流した地方で、土地の神樂なども仲々面白い。神樂は農民の間にそれを行ふグループが三つばかりある。私は神樂の服裝殊に猿田彦の服裝が蒙古や支那劇にそっくりなのに驚くと同時に劍や槍を水車の如く振り廻はしたり劇しく打合はすのに驚いた。驛のホームの前に家があつたことはホームの有様を通して様々な世相を私に感じさせた。「召集の噂しきりて戦のきびしさにありこの山國も」「兵送る兒らが無心の軍歌山驛の春未だきびしも」毎日毎日兵隊達が出て行つた。萬歳の歡呼がひとよき終つて、山々が昏く沈み、驛の裏の溪流の水がたそがれの空の光を白く反映し、シグナルが青く灯もつた寂寥を私は忘れることが出来ない。今はその呪

はしい戦も終つた。向ひの神宮寺の山は、町の人々が持ち寄りて春の節句の宴を開くところ、久しくその風習も遠慮されてゐたが今年には賑やかにやりたいとの話だ。

春なれば神宮寺

枯草山の枯草も光あかるみ

細き道折れつゝのぼる

頂いただに里の童等群れ遊び

町見下しつ大聲に叫びてありき

しほからき子等熊笹をかつぎけり。

と私は歌つた。

陰鬱な時代の冬が開けて柔かい春陽が射し、枯草山に子供達の嬉しさうな聲がはすみ、朽ちくろすんだ病葉の底から露の霽や、わらびやぜんまいが生え始める。雪が解けてせらぎの水音も高なる。

D、盲人芳太郎

この町に芳と云ふ按摩がある。芳は唄や三味線や琴が上手なので町の人気者である。町の宴會には無くてはならぬ人間であるが、まるで乞食のやうな身なりをしてゐる。垢じみたよれよれの着物は裾でちぎれてゐる。芳はぼろを引きすつて歩いてゐる。一風變つたこの男はどこかに人に屈しない魂を持つてゐて、時としてそれが大變生意氣にも見えるので、人々は可哀さうだと思つてもかまつてやる氣が起らない。彼もまた平氣である。芳は汚いので、乞食の如くに輕蔑する人もあるが、彼は三味線や琴の話になると仲々一家言を持つてゐる。それに勘が良いので盲目の癖に時計を修繕する。彼はまた非常に姿の美しい盲目

○細君を持つてゐて、その間に七歳になる娘がゐる。彼は戀愛結婚の美しい物語りの主人公でもある。

浅春の雪解の町の午さがり盲目の芳は杖引きてゆく
破衣裾に裂けたり薄陽さすぬかるみ道を盲目歩めり

町祭りの夜芳大いに歌ふ

酔ひ痴れし里の祝の酒筵盲目の芳の歌にはすみて
酔ひ心地體ゆさぶりひたむきに歌ふ盲目の歌悲しけれ
貧しとて誰ぞあさめるや破衣盲目の芳に歌と戀あり
過ぎにける町の噂の戀歌に盲目の妻を芳は娶れり

盲ひたる芳の戀妻美しけれ七つの娘あはれ愛らし

吾兒學校より歸りて告ぐ

吾兒告げぬ芳の子供は傘もなし春の霰に濡れて歸りぬ
吾兒云ひぬ汚れたる着物の外は服もなく靴も持たざる子供哀しと
父母を盲目に持ちて幸うすきその生活にその子愛らし
淡雪のぬかる小路に子と語る盲目の父の杖長きかな
或時は肩を揉みつゝ一くさり生田の節を語る芳かな
指先のすぐれし勤に壞れたる時計繕ふ芳は聴しも
日本に時計繕ふ盲目あり大衆雜誌芳をたゝへり
まだインフレがひどくならない戦時中、時々町の大衆食堂が開かれて、一杯五十錢の飯

餛が喰べられた。芳は家族三人連で睦しく食堂で食事してゐた。

かにかくに食堂に来て餛喰ふ芳の家族は今日まどかなり

芳の子はこの食堂の晝食時盲目の母の手を引きて来ぬ

細指に茶碗まさぐり盲ひたる母の眼元は子に微笑めり

見えされどいつくしむごとくまなじりに微笑む母は子にやさしかり

晝飯時この騒々し食堂に盲目の親子黙し喰み居り

節くれし太き指もて饒敷ふ芳は財布を首に掛けたり

山國の町食堂に饒拂ふ芳の財布の赤き紐かな

刑部に美しきもの一つあり盲目の芳のあはれ戀歌

E、野草（若きヒューマニスト藝術家達の死）

野草を喰べると私は太齋春夫のことを思ひだす。太齋は私達に野草を食用にすることを教へてくれた人間である。芹、なづな、甘草、たんぽぽ、土筆、私は子供を連れて春の野の明るい陽の光の中で今はもはやゐない春夫のことを思ふのである。昭和十九年六月春夫は中支方面の戦闘で死んだ。

太齋春夫といつても人は知らないかも知れない。彼は一無名作家に過ぎなかつたから。

しかし春夫はめづらしい才能のある作家の一人で人間も非常に良かつた。殊に彼は六角紫水に愛された弟子で漆工家としては已に認められ、新しい意圖を以て漆繪の研究に従事

してゐた。彼は漆繪と油繪の接近を色々工夫し試作してゐた。新制作派展に出した生蕃風俗を扱つた二點はその佳作で、その中の一枚は三井のコレクションに入つた。油繪も二科へ入選したり臺灣の展覽會で賞を取る程の腕前だつたし職人藝を一步も出でゐない漆繪作家の中では彼程の進歩的な人材はゐなかつた。彼は近所に住んでゐて殆んど毎日のやうに遊びに来てゐた。家人同様にしてゐたので彼の作品に就いては一枚毎に相談を受けた。彼が漆繪を洋畫に近づけようとした努力は少し無理だつたかも知れなかつたが、そのマチエールの宿命的相違は別として彼が陳腐な漆繪の傳統中に油繪のモチーフを抛り込んだ功績は充分に認められて良いと思ふ。數から云へばそれ等の試作は僅に十數點に過ぎないのだが、今の所彼の意志を繼ぐ漆繪の作家は當分日本に出ないと思ふから實に残念だ。彼は服装に頓着しない男で、いつも労働者のやうな恰好をしてゐた。容貌が魁偉で風采があがらなかつたから案外彼がモダンな工藝品の作者だとは誰も氣がつかなかつた。彼はそんな無精な面構へで第一流の化粧品屋の仕事などもしてゐた。彼の無骨な労働者のやうな手が

有閑マダムの白粉の小箱を作つてゐたのである。

森暢のすゝめは彼は東大寺の日の丸盆と三月堂の食堂の經机の模造を數箇作つた。東大寺の寶物庫で私達は日の丸盆の寸法を計つたり、その質や漆のはげ具合、龜裂の様子などを仔細に檢べた。私は手元に残つた彼の遺品の盆の上に摘んで來た野草を盛りながら靜に彼の生前の事を偲んだ。

彼の親友である彫刻界の鬼才高橋英吉が、ガダルカナルで戦死したのはその前年であつた。高橋の一代の傑作、觀音像が新制作派展に陳列され、それに賽錢があがつた話は耳新しいことである。「母に捧ぐる觀音像」はその後暫く太齋の家にあつた。彼はアトリエの隅にその觀音像を安置して香花をたむけ、口癖のやうに山の中にこの觀音の堂を建て自分はその堂守にでもなつて一生過したいなぞと云つてゐた。非常に親切で人情深い性質だつたから竹馬の友であつた親友の死に非常なショックを受けたらしい。高橋は本當に惜しい作家で彼の家は兄弟五人の中、彼を加へて四人迄戦死してしまつた。私は太齋と高橋の遺

作集の相談をしてゐたが時勢が悪化しその遺作集出版の話も一頓挫してゐる内に太齋も出征した。出征の時は大變元氣だったので戦死の報を聞いて全く驚いた。太齋が死んで少したつてから太齋のもう一人の親友塚原介山が死んだとのことだ。

私は太齋と塚原と三人で東尋坊に遊んだことを思ひ出す。塚原は酔つて幸徳秋水の詩を吟じた。體の頑丈な偉丈夫で實に男の中の男一匹といひたい程氣持の良い男だつた。彼は福井の陶工で、福井では有名な作家だつた。

昔黒色聯盟のアナキストの經歷を持つてゐた位の反逆兒で権力や財力に常に反撥してゐた。餘りに一徹なロマンチストで死に瀕してゐる肺病の娘と結婚し赤貧の中に新婚の妻の入院費に困つてゐるといふ彼の話を出征少し前の太齋から聞いた。彼は自分に戀してゐる悲しい肺病の娘に最後の精神的満足と與へる爲に結婚した。誠に無謀な話であるが、その純情は今時珍らしい。細君が死んで暫らくすると、健康そのものゝやうだつた彼も後を追ふやうに肺病で死んだ。私の知つてゐる塚原の生活は半分野人のやうな生活だつた。三十

四五の血氣盛んな彼だつたからあんな無法な生活も出来たのだらうが、これも彼の短命の原因になつたのかも知れない。彼は窯業所に附屬した小さな掘立小屋に寝起きしてゐた。「雪國の嚴しい寒氣をこの小屋で辛抱の出来るものは私以外にはあるまい」と多少彼は自慢げに語つた。彼は茶碗で酒を私にすゝめながら縞蛇の干物をばりばり喰つた。軒には彼の捕へた蛇が骨を抜かれて數匹吊るされてゐた。清水蟹も酒の肴だつた。福井の町では變り者の一人だつたが私は彼から奇人を銜ふやうな嫌らしい感じは一度も受けなかつた。彼は藝術に對して情熱的で清潔で人に對しては心から謙讓で禮儀正しかつた。私は會ふ毎に年少の彼に尊敬する氣持を感じた。太齋も高橋もそして塚原も皆ヒューマニストだつたからだ。私は今彼等が生きてゐたならばと思ふ。

新制作派の青年作家和田知が北海道で馬に蹴られて不慮の死を遂げた。和田は私の弟子で疎開前の二ヶ月ばかり私の家に同居してゐた。彼も才能のある作家で生え抜きの農民の子だつた。彼は十六歳の時突然私をたよつて上京した。スケッチが非常に上手だつた。彼

は二度ばかり新制作派にその作品を発表したが、應召になり肺を悪くして四年間も療養所にゐた。貧農の家に生れ小學校しか出なかつたが非常な讀書家で岩波文庫の思想物などを愛読する程知識欲が旺盛だつた。やつと退院したが彼の家は白衣の勇士を呑氣に静養させるべく餘りに貧乏だつた。彼は無理して郷里甲州の葡萄園や其他の場所で働いた。彼にはその勞働が餘りに劇し過ぎたので將來の相談の爲に私の所に來た。私が疎開してから菊地一雄の所に暫らく居り、菊地君が應召したので、鶴田知也君の紹介状を持つて北海道に行つた。

北海道に行く前に刑部の私の假寓にやつて來て三日ばかり泊つて歸つた。「農民出身の農民の畫家」これが寝ても覺めても忘れられない彼の理想でもあり感傷でもあつた。彼は北海道の近代的酪農生活や今後の繪の仕事に就いて希望をもつて話してゐた。其後彼の消息が絶えたのでどうしたらうと家内で色々と噂してゐた處、終戦後菊地君から彼の急死が知らされた。原因は牧場に馬を連れて行く途中、はじめその一匹が暴れ出しやがて全部の

馬が一緒に暴れ出し、仕事に不慣れな彼は制止せしめることが出來ず、重傷を負ひ不慮の死を遂げたとのことであつた。

彼は農民の良い性質も悪いところも持つてゐた人間であつたが、病院生活中聖書を讀んで、非常に精神的なものに對する憧憬を持ち始めた。彼は常に内省しながら高いものを求めてゐたやうである。勿論それは青年に有り勝ちな感傷の範圍を出ないものであつたかも知れない。しかし彼がつまらない野心を棄て、農民の子としての宿命を農民の中に求めながら彼の藝術を前進させたいと考へたことは正しいことであつた。

彼は淺草の看板屋で働いてゐた。三河島あたりのプロレタリアの子供達を盛にスケッチしてゐた。彼自身がさうであつた如く彼の描いた子供達はいつも怯ち怖れた様な顔つきをし憂鬱で醜く暗く悲しかつた。私はその時代の彼の繪をいつも感服してゐた。彼が生きてゐたら彼は特色のある作家として生長したかも知れない。

妹から中野秀人が爆死したと云ふ手紙を受け取つた。十日ばかり東京に行つてゐたら死

んだ筈の中野君の訪問を受けた。死んだのは柳瀬君だった。柳瀬君は新宿驛で切符を買ふ爲に行列中直撃弾を受けて死んだのださうだ。間違ひとは云へ中野君の追悼文を頼まれた隨筆の中に織り込んで新聞社へ送つた僕だったが、新聞社でその箇所だけを削除して呉れたので中野君に對しては甚だ良かった。しかし柳瀬の死は誠に惜しみ切れないものがある。思想弾壓下に柳瀬は彼の生命である漫畫の執筆を禁止されてゐた。彼の生長は完全に官憲によつて差し止められてしまつたのである。終戦になり再び彼の藝術が言論自由の世界に發言權を得た今日、彼はもはやゐないのである。しかも彼の死が爆死と云ふもつとも不幸な死であつたことを私は悲しまずにはゐられぬ。昭和十九年中野秀人のアトリエで柳瀬に會つたのが最後であつた。小柄で丸い子供のやうにくりくりとした肉附きの良い笑顔が浮んでくる。

島田晋作から紹介されて柳瀬に初めて會つたのは昭和十年頃で種蒔き社だつた小牧近江氏の青山の家だつた。島田は小牧氏の弟で私の小學校時代の友人だつた。初期プロレタリ

ア藝術運動が「種蒔く人」によつて提唱されたばかりの時代で、畫家には當時「解放」の記者をやつてゐた松本弘二がゐた。いつかその頃のことを佐々木孝丸氏が人民文庫に書いたことがある。私が美術學校の一年生で廿一歳の時だつたから柳瀬も私と同年輩位だつたらう。小柄で子供供してゐたから年よりも遙かに少年に見えた。聞けば彼は十七歳の時福岡で個展をやつたと云はれてゐるから非常に早熟だつたに違ひない。その頃彼は如是閑氏の主宰する雑誌「我等」の表紙を描いてゐた。赤と黒で線太に描いたその表紙繪はまさまじしい記憶を未だに持つてゐる。彼は私にアンデパンダンの企畫とその設立を相談した。アンデパンダンと云ふ言葉でさへ私にとつては初耳だつたので彼は遙に私よりも進歩してゐたらしい。社會主義同盟の展覽會があり、それに小牧氏が私の繪を出品し吉田卓、前田利三なども出品したやうだつた。私は美校三年迄種蒔き社の青年部にゐたがその後左翼方面の組織から身を引いてしまつた。自然柳瀬との交友も絶えて私はプチブル的な一官展作家になり、さうした没落者の通有として一種の頹廢的ベシミストになつて今日迄來てしま

つた。其後彼はプロレタリア陣營の漫畫作家として活動してゐた。彈壓、檢舉、投獄が當然彼に經驗された。出獄後死んだ松下春雄のアトリエを彼が借り受けることに就きそれとなく光風會内で問題になつた時私は彼の爲口添へをした。間もなく如是閑氏の家で再び彼と久しぶりで會ひ、その後舊交を温めるやうになつた。如是閑氏の六十一歳の記念の肖像を描く爲に或日翁を真中に畫架を二人で並べたが、その肖像は一日で未完成の儘抛棄されてしまつた。未完成の二つの肖像は長いこと翁の玄關の隣室に色々の雜物と共にあつたが多分今度の空襲で焼けたことと思ふ。彼の油繪はほんの僅しか見てゐない。勿論彼の木質はグロスばりの漫畫にあつたのだが、その漫畫は執筆禁止だつたから彼も描かなかつたらしい。彼はグロスの畫集を私にくれた。その畫集は今も私の書架に彼の憶ひ出として残つてゐる。

新宿驛前の聚樂食堂のコンクリートの半分以上が爆撃で焼け落ちて國民精神總動員の國民精神がすつ飛び、その廢墟の壁に色々のピラが貼つてある。新宿空襲の時直撃の焼夷彈で

死んだ不幸なる柳瀬の靈よ、もう一遍眼を開いてこの町を見よ。グロス、スタンラン、ドミエ、コルウイツ、フオランの偉大な作家達の描いたやうな畫因に交つて君の畫因は鎖から解き放たれ、今この悲しき街に散亂してゐる。現實は苦痛の中にも鉛筆を持つ自由を許されてゐるのだ。民主日本、かつて若かりし日の我々の夢が實現しようとしてゐる。

(終)

母の像

—我名は生命の書に記されしや—

山國の寒さゆるみて春近むこのあかときを母逝きにけり

昭和廿一年二月五日疎開先の假寓で母は永眠した。「人間畫家」の第三章を執筆中であつた。行年七十二歳、年齢として不足はなかつた。この十年間は殆んど病氣勝であつたからこの年迄長命したことが寧ろ意外にも思はれた。只戀しがつてゐた自宅で死ぬことが出来なかつたこととスマトラにゐる弟が復員する迄せめて生きて居りたかつただらうと考へると残念な氣がする。「私が死んだらその死顔を寫生してお父さんのデスマスクと一所に並べて貰ひたい」と妻に死ぬ二三日前語つたとのことで私はその死顔を二枚ばかり鉛筆で描いた。大變安らかな臨終で眠るが如き表情ではあつたが油繪で私は描くことが出来なかつた。鉛筆で描いた二枚も餘り實感があるのでいたいたしい感じがすると醫師にいはれた。私は寫生帳を閉ちて、他の兄弟達にも見せる勇氣がなかつた。私は母の像を三十號に描い

新制作派展に三四年前に出品した。横向きのと前向きのも二枚の肖像は唯一の母の記念になった。二十年ばかり前だったが、前田寛治さんが帝展制作に「母の像」を描いてはどうかと勧めたことがあつた。寛治さんは私の母の顔が非常に良いから、きつと面白いものが出来るに違ひないと語つた。だが當時私はそれを描く自信もなかつたし、繪因として矢張り若い娘の方に興味が多かつた爲描く氣になれなかつた。フランスで私はホイットスラーの有名な母の像を見た時私も名作と云はれる程の母の像を描きたいと思つた。レンブランの澤山な母の像やシャヴァンヌ夫人像などの寫眞を眺めながら其後色々母の像に對する計畫を立てた。しかしさう思ふだけで昭和七年歸朝してからも仲々母の像を描かなかつた。それは偶然私が肖像を描いた老婦人が死んだので「私が母の像を描けばその後で母の死が来るのではないか」などと云ふ不吉な迷信が私の母を描くことを躊躇させた。昭和十七年の春母が肺炎で重態であつた時私は母に云つた。「お母さんしつかりして下さい。今死んでは困るお母さんが死んだら私の『母の像』の制作の希望は失はれてしまふ。がんばつて

下さい」と私は夢中になつて云つた。母が病氣して氣の弱いことを云ふ時、私はその後も「母の像」、私の不朽の名作が出来ると云ふことにした。處が今度だけは母にそれを云ふことが出来なかつた。疎開した翌年である昨年の春も母は重態であつた。しかし不思議に助かり終戦後は奇蹟なほど元氣になりリョウマチで不自由な足を引かずつて近所を散歩するやうになり、東京へ歸る希望を抱きながらそわそわと荷物の整理や縫物など終日してゐた。クリスマス之夜には母を中心にして子供達が對話をやり讚美歌を歌ひなぞして賑やかに過した。母も元氣で一緒に歌ひ、若い日のことを思ひ出し英語の歌などかくし藝に出してはしやいでゐた。正月も元氣で楽しく皆と雑煮を祝つたが、十日頃であつたか知人が來て東京の生活の悪條件や鐵道の混雑などを話し上京の當分不可能なことを力説した。急に母は失望を感じたのか元氣が無くなり病床に着いた。始めは單純な風邪だつたのだが下痢が伴ひ持病である重隔性トク炎が起り遂に再起し得なかつた。死ぬ三四日前から呼吸も脈も正確になりよく安眠出来るやうになつたので、この様子なら持ち直すも

のと私は思つてゐた。病態を良い方に考へることによつて心配を無理に落付かせようと強ひて努力してゐたことはいけなかつた。丁度その地方三ヶ所に文化運動が生れ、その組織活動の爲に津山、勝山、新見と汽車に乗つて往復してゐたから、母の病氣を氣にしながらも憂鬱なる自分を叱りつけるやう勵まして、又一方不吉な考へを無くする爲に故意に母の病床を避けたやうな感じもあつたのではないかと思ふ。死ぬ日は終日家に居り、母の病床の側で「人間畫家」を書いてゐた。夕方友人の三上君が牛乳を持って来てくれた。病床で母も見舞の禮を述べて戯談まじりに英語で「トリー、レート」ですよ」などと云つたので、「おばあさんお元氣ぢやありませんか？」と三上君も安心して歸つた。夜中に女房を呼んで尿をとらせ、夜具を掛け直して貰ふとたん「頭が痛い」と叫んだと思ふとその儘駄目になつた。血粒が腦の血管を塞いだのだ。二秒位の間だつた。皆で呼んだがそれつきり答へがなかつた。

「私の肖像は夏の着物ばかりだから冬のをその内に描いて貰はう」と云つてゐた。私は

疎開地の風景を取り入れた母の像を描く積りであつたし、編物をする母のちゃんちゃんこ姿も描きたいと考へてゐた。第三と第四の私の「母の像」は永久に出来なかつたし、レンブランやホイッスラーの不朽の名作も出来なかつた。ただ二枚の母の像は私の貧しい作品の系列の中に懐しい憶ひ出として残つた。母はモデルになりながら、「私は品の良い柔和なお婆さんに描いて貰はねばならない。その爲には心の中で楽しい美しいことを考へながらモデルになつてゐるのだよ」などと云ふのだつた。「露草を持った母の像」は母のさうした言葉の追憶の中に亡き祖母の像として私の子供達にも傳へられねばならない。

母は父魯庵の豫備門時代からの親友布施謙太郎の妹で明治八年日本橋本石町（後にその家の敷地は博文館になつた）で生れた。祖父が府中勤番の旗本なので今静岡の刑務所になつてゐる城内の一角で育つた。派手な家庭だつたので幼少の頃は長唄や踊りなどを習はせられたが、祖父が再び東京に出て、士族の商法其儘の失敗をした揚句死んでからは全く貧

窮の中に育つた。帝大生の兄謙太郎が私塾を開いて英漢數を教へ一家をさへてゐた。父魯庵はその親友を助けるためにその塾で英語を教へた。母は出來の良い娘だったので父が口を利用して巖本善治の明治女學校へ入學した。明治女學校から女子學院に轉じその高等部を卒業し父と結婚した。父は少女の母を見て「明るい陽氣なこの娘を妻にしたい」と決めて、女學校へ入れ、面倒を見、妻にしたのだから戀愛結婚には違ひなからうが甚だ理性的なコースを採つたわけである。

母はその次兄や祖母が早くからクリスチャンであつたので自分もその影響を受けてクリスチャンになつた。女子學院卒業當時は静岡のメソヂスト教會で五十人位の青年達に英語のバイブルを教へたり、オルガンを弾いたりして獻身的に働いてゐた。

ホーリネスの監督であつた中田重治氏なぞその時代からの知り合ひであつたらしい。當の進歩的な青年はそれぞれ二つの方向を持つてゐた。一つがクリスチャンニズムでありもう一つがダーヴィニズムであつた。私は母のクリスチャンニズムと父のダーヴィニズム

によつて育てられたらしい。母は音楽が大好きだつたので父と結婚後も音楽學校の専科にピアノを習ひに通學してゐた。これは私の出生によつて中絶した。母は父の原稿の校正や整理をさせられたり、毎晩父の指導でカーライルを読ませられた。しかし子供が生れてから母は全く平凡な主婦として家庭の人となつた。母は中年から太つてしまつたが、新婚當時はすんなりとして居た。幼児の私を乳母車に乗せて夜會卷姿のハイカラな細君は「カミング・スルー・ゼ・ライ」などの英語の歌を口ずさみながら江戸川岸を散歩した。當時の江戸川はまだ古いなごりを持つた櫻並木の靜かな景色だつた。熊の毛や駝鳥の襟巻半コート等の母の服装の明治ハイカラ調の品物は長いこと家に残つてゐた。父の死後母は一生涯自分が平凡な主婦だつたことを惜しんでゐるやうに見えた。急に知識慾が生れ文藝欄の論說なども讀むやうに一時はなつたがその後病氣勝だつた爲いつか止めてしまつた。しかし私が畫家であるので美術界のことにはどんなつまらぬことにも注意し又妹が音楽家だつたので音楽の知識を得ようと努力した。展覽會、音楽會はよく出掛けたし、芝居や活動寫

眞も好きであつた。時々築地座、新築地、新協の公演なぞにも私に伴はれて行つた。左翼劇場の観覧席にその場の空気に似合はぬおばあさんを見掛けた人もあると思ふ。何しろ石を抛げられた明治中期頃のクリスマチャンなので、正義觀も強く慷慨悲憤家でもあつた。瀧澤修君の演技が好きで最後に見たのは「火山灰地」だつた。私の家に来る友人達の會話から色々と新しい知識を得ることが大きな楽しみだつた。「私は何處にも行かれなくなつても、かうして皆さんのお話を聞いてゐると進歩しますよ」なぞと嬉しさうに語つた。疎開してからはさうした雰圍氣が失はれ全く無縁の土地なので寂寥に耐へられない様子でもあつた。一時全く食糧に不自由し、甘草や土筆ばかり喰べたことがあつた。澤山取つて來た土筆の袴を取つたり、私の釣つた小さな鮪を串さしに作つたりするのは母の嬉しい仕事だつた。疎開してから足が不自由で遠方には行けなかつたが氣分の良い日は一二町程の溪流の岸に出て四つになる孫と遊びながら山々の美しい景色を眺めて非常に楽しさうな時もある。東京を去る時は母は仲々決心がつかきねたのだが私が無理に連れて來たことを空襲

が始まつてからはいつも感謝してゐた。汽車が津山から次第に山へ這入つてゆくので何となく心細くなり、窓外の景色を眺めながら東京を始めて放れて行く母はぼろぼろと涙をこぼしてゐた。母はたうとう再び東京の我家に歸らずに他國の空で永眠した。

母の死の前後三四日は暖い日が続いて梅蕾もほころぶかと思ふ程だつたが再び葬式の日から寒くなり骨を拾ふ朝は粉雪が降つてゐた。この土地へ來てから親友になつた金田さん兄弟の醫師の、筆舌に盡せない程の手厚い看護を母は受けた。母は今の東京では到底不能なくらゐる充分な治療を金田さん御兄弟にして頂いた。貴重な藥を惜し氣なく使ひ、絶對に手に入らぬ注射液も無理して探して頂いた。疎開地で最初の發病の重態から救はれたのも全く金田さん御兄弟の親切によつたのだと思ふ。「魯庵先生の夫人をこんな避地の藪醫者が殺したことは文化に申しわけないことでした」と父を崇拜してゐる金田さんの兄さんはしみじみと心から母の死を悼んで下さつた。母は金田さん御兄弟を神様のやうに思ひ、いつも感謝してゐた。

戦時中基督教は國賊であつたが終戦になると我家では妻や妹や娘達が集つて毎晩讃美歌の合唱が始まつた。七十二歳の母も仲間に入つた。

年老いても少女らしいロマンチックな夢を失はない彼女ははしやいで英語なぞ交へて娘達に會話を試みたりした。近所では驚いてしまつた。「あそこの家は耶蘇だつたのか」と初めて知つたのだが母は英語の出来るおばあさんとして評判になりおばあさんに英語を教はりたいと云ふ娘さんなども出て來た。しかし私が地方文化運動であちこちしはじめるとふと昔のことを思ひ出して心配にもなつたらしい。母には「言論の自由」が來てゐると云ふ眼界が判然つかめなかつたらしい。母は決して偉い母親でもなく普通の女らしい女だつたから私の學生時代に「お前は人類を愛さないでも良いからお母さんを愛してくれ」と云つて泣いて私を當惑させたことがある。當時卓怙にも私はそれを一つの口實にして左翼組織から逃れたのもあつた。

母が生きてゐた時は何んでも母が中央集權で母を中心にして妹達家族や親類が集合して

ゐた。事實上私が經濟的・生活の責任者ではあつたが母の存在は私が母の家の寄食者の如き感をいつも抱かしめた。母を中心にした經濟的負擔の大きい時、又私が貧しくそれを支へる力を失はうとするとき、私は家族制度の重壓の中に私は妙な矛盾をいつも感じた。「この家は母の家であつても私の家ではない」とさへ生活の分量に堪へきれず長男に一切の責任を強制する日本の封建的家族制度を呪はずにはゐられなかつた。母が中央集權であると云ふことは母自身は少しも知らないのであるが、その中央集權は心理的な内容に於て如何に母個人が比較的他の母親よりも進歩的であつたとしても、多くの封建的習慣と精神的浪費を私や妻に與へる結果になつてしまふのである。私は私の經驗を通してさうした日本のプチブルの家庭の一面の暗さを感じずにはゐられない。お互に愛すればこそ、又家族の一人一人が自由であればこそ妙な矛盾が絶えずその中に起るものである。若し徹底的な封建的思想によつて統一された家庭ならばたとひ冷くともかへつて始末は良いだらう。プチブルの經濟的轉落と共に日本の美風である家族制度の封建的イデオロギーは、早晩その内部

の支へ切れぬさまさまな矛盾の相剋のために倒れるだらう。昭和七年僅かばかりの父の遺した金を殆んどフランスで使ひ果して歸つて來た時には家には殆んど金がなかつた。母親と三人の妹と末弟は皆私が面倒を見ねばならなかつた。父のプチブル的な生活形式が母親と一緒に新しい私の家庭に流れ込んだ。残つた五千圓ばかりの金で家を建てたとたん私達は無一文になつた。私は友人達にくらべて決して収入の少ない方ではなかつたが、そして格別の贅澤を家族がするわけではなかつたが、人数が多いので入費が量み私の取高はいつも焼石に水だつた。私と女房の衣類は、質屋を這入つたり出たり流れたりした。私も女房も繪を抱へて實に嫌な思ひをして、無理解な人々の間にも繪を行商人のやうに賣らねばならなかつた。私の繪は金持には氣に入らなかつたし、私自身金持ちの御機嫌が取れないので金持は又私を好まなかつた。その時代の私の作品は極度の暗いベシミズムに蔽はれてゐる。しかし私は良い親友達を澤山に持つてゐたのでその人々は私の生活を一所懸命に助けて呉れた。私は巴里では日本に歸つたら左翼藝術運動の陣營に飛び込む決意を持つてゐ

た。その爲に私はブラジルに亡命した佐野碩から紹介狀を買つてゐた。しかし歸つて來た時彈壓の嵐は吹きまくつてゐたので私はすっかり勇氣を失つてしまつた。それに家庭の大きな責任が重く襲ひかゝり私の思想は失調した。

私は急進的リベラリストとしての範圍に身を置いてせめて私に出来る文化活動をやるべきだと思つた。私は正しい組織とは無關係に只一人でかくれてどこかの片隅に銃眼を据ゑ一發でも奴等の陣營に打ちこんでやりたいと常に考へてゐた。だがそれさへもいつの間にか出来なくなつた。

「嫌らしい環境と鬭争する條件がすっかり奪はれてゐた。」ので私の弱々しい感傷の告白は酒に溺れる末期的癡癡性の中に轉々とした。私が酒を飲んだことは家庭を混亂させたばかりでなく極度に暗くさせ又一層私を憂鬱にさせた。しかし帝展騒動は私をして現實に抗争し得る絶好の機會を與へた。そして新制作派協會の結成は私の藝術至上主義の新しい出發になつた。「私は藝術に生きる満足」を初めて知るやうになり、その喜びを通して少

しばかりではあるが自信を得た。私の歸朝した昭和七年から十一年頃にかけて、社會は不景氣と失業の中にあつたので繪は仲々賣れなかつたが、戦争インフレは皮肉にも次第に私の經濟生活を好條件に導いた。

しかし昭和十六年頃迄私は貧乏に追ひまくられてゐた。三人の妹は嫁に行つたが二人の子供が殖え母親は病氣がちになつた。

「失せゆく寶、などかたのまん、錆びゆく黄金何か惜しまん、ただ求むるは天つ國の永久にさかゆる清き住居、主よ我名は天つ國の生命の書に記されしや」私達夫婦が金策の疲勞と失望の底にぼんやり考へてゐる時母はこんな讚美歌を歌つた。「貧乏は恥ではない。お前のお父さん魯庵も貧乏だつた。お前の繪は地味だ。しかしお前の繪は品が良い。そして眞面目だ。世間は派手な繪を好む。世間がお前の繪を認めない。しかしお前がこつこつやるならば今にきつと世間も理解するやうになる。ステップ・バイ・ステップ、野心を起

してはいけないといつもお父さんはお前に云はれた。」と母は云ふのだつた。行きつまつて途方に暮れてゐる時偶然どこからか金が這入ると母は涙をこぼして天がお前を助けたのだと喜ぶのであつた。純粹で無邪氣で人が良く人に御馳走したり人を助けたりすることの好きな母、彼女が金持の未亡人であつたらおそらく満點の幸福者であつたらう。その癖、氣が小さく弱くいつも「これでは大變だ」と家中の經濟の立て直しを主張するのだが誕生日や何か妹達夫婦や知り合を招いて大御馳走をする。「お前にもたびたびすまないが何とかしてやつてくれ」と私に依頼する。「あの人は本當に氣の毒だ。大變だが家に置いてやつておくれ」なぞと云ふ。私が大阪方面でやつと工面して繪を賣つた金を送金するとピアノを買つてしまつた。音楽の好きな母が「お前に相談しないで悪かつたがリサ子の爲になつた」お母さんはまるで櫻の園のラフネースカヤ夫人だ。今貧乏をめめそ心配して涙を拭いてゐる手で一方ではほどこしをしたり甘い夢を見てゐる。處で酒を飲んでゐる俺も

呑氣に玉つきの眞似をしてゐるヤクザのロバーヒンと云ふところかも知れぬ」と私は或日妻に語るのだつた。さうした色々の矛盾は妹達が一緒にゐる時に一番劇しかつた。皆一人一人獨立した性格と考へ方と趣味とを持つた家庭、そしてすべてが善人ばかりである家庭、しかもそれ等の一人一人の希望を果すべき充分の經濟的能力を持たぬ家庭、そして一人一人が批判をお互ひに持つてゐる家庭、これは日本リベラリズムの悲劇の縮圖なのかも知れない。私達家族の一人一人がその悲劇の責任を背負つてゐる。一番苦しんでゐるのが妻であり、憂鬱なのが私なのである。母はクリスチャンニズムの思想と生れながらの善良な性格、子供に對する盲目的なほどの愛情、それに加へて父の影響を受けたため人間に對する厳しい批判力を持つてゐる。有名人父の未亡人として名譽と見識と自負心を持つてゐる。又旗本の娘としての女大學的な封建的イデオロギーも持つてゐる。

しかも病氣勝だつた爲に自己の肉體と周圍に對しては何かしら絶えず不満を持つてゐる。健康な同年輩の人々に對して羨望をも感じてゐる。女らしい性質だから嫉妬心も強い。私

は廿年間さうしたむづかしい母の機嫌氣妻を取り最後迄誠心をもつて仕へた妻に感謝してゐる。しかしそれにも拘らず母は我家のある時期に於ける大黒柱であつた。母がゐるなかつたならば私の行動は家族に對してもつと無責任であつたかも知れない。あれだけ酒を飲みながらも私をもう一步の處で支へてくれたのは母への封建的道德の爲であつた。母と子供と妹や弟の存在は私と女房の倦怠期を喰ひ止めたのだつたかも知れない。私の家庭は多くの矛盾の中に幸に健康を維持したのだつた。

母が死んだのは二月五日の三時三十五分だつた。それから一時間後私は非常な複雑な追憶の中にスケッチブックをとつて母の死面を描いてゐた。私はそつと母の冷たい顔をさすつたり細く柔かい白髪をいぢつたりした。又眼ぶたを開いて見たり口唇に觸れたり顔を寄せて已に空しく消えさつた筈の呼吸を感じようとした。可哀さうな母よ」と私はさう思つた。するともう一つの意識が「幸福なる母よ」と囁いた。私は不孝だつたのだからか？ いや親孝行だつたのだからか？ 私は母の死顔を眺めてゐた。もはやそこには一

切の虚偽をも許されない嚴肅な一線がある。愛だ。私は愛情の悲しい中央集權に訣別を告げた。

私は神主の戸部さんと葬儀の相談をした。母は「この土地で基督教の葬式は無理だから私の身に萬一のことがあつたら戸部さんに色々親切にして頂いてゐるからお願ひしてくれ」と常から云つてゐた。戸部の太夫は酒呑みで釣の名人で實に善良な人だ。正則英語學校の出身で女房の子供時代からのお馴染みで、終戦後は「神道民主化」に就いて私の意見を聞きにくる。私は戸部さんと相談して「葬りの詞」に馬太傳の山上の垂訓を織り込むことにした。バイブルを織り込んだ祝詞「生命の書に母の名の記されむことを」と云ふ言葉や「民衆の春たちかへる云々」といふ文句も加へた。この町の習慣で、葬儀は町の人々によつて一切執行されることになつてゐた。民衆の手による母の葬儀は民主日本の春にふさはしい氣持のよいものだつた。「内田敬子刀自之命之柩」と云ふ弔旗と柩を先登に細長い町を通つて葬列は大佐山中腹の火葬場へ向つた。人々は手に手に一本づつ櫛の枝を持つてゐる

た。疊つた陰鬱な空風が冷たく谷には白く雪が残つてゐた。火葬場と云つても三十坪ばかりの空地に一間半四方位の穴が掘つてあるだけである。薪と藁が堆高く積まれ柩はその上に置かれ、火は私の手によつて點じられた。

「いにしへの鳥邊の山もかくやありし山のはふりに母焼かれけり」

母は中國山脈の大自然の中でもつとも原始的な方法によつて火葬されたのだ。母を焼く煙りが町の方から其日いつ迄もいつ迄も見えた。涙ぐみながらふりかへりふりかへり私達はその煙りを眺めた。翌日私達は町の人々と再び骨を拾ひに山へ登つた。粉雪がチラチラと降つてゐた。子供達は火葬場の空地の前の櫟林で青い美しい小鳥を見たと言つた。

「露草を持つ母の像」を中心にしつらへた祭壇の前で十日祭が家内だけでしんみりとはれた。後で私達はその前で讚美歌を歌つた。「柔和なるものは幸なりその人は地を繼ぐべければなり。心の清きものは幸なりその人は神を見るべければなり。」私は母を偲びな

から聖句を心の中でくりかへした。母に連れられて教會に行つた幼い日のことなぞ思ひ出された。(終)

5507

表紙 カット
扉 カット
著者 野田英夫

昭和廿二年七月五日
昭和廿二年七月五日
發行

定價金六十圓



人間畫家

著者 内田 巖
發行所 東京都中央区銀座四ノ二聖書館七階
小池 又一郎
發行所 東京都杉並區馬橋四ノ四九九
竹澤 眞三
印刷所 東京都千代田區神田神保町一ノ五九
中央印刷社
配給元 東京都千代田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社
發行所 東京都中央区銀座四ノ二聖書館七階
株式會社 新華社

電話東京橋 〇六五一、一〇〇八、六六八一
振替東京 二六七三二
日本出版協會 員番號 A一〇八〇一〇番



720.4

U14

4⑦

年

月

日

569

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
61	62	63	64	65	66	67	68	69	70
71	72	73	74	75	76	77	78	79	80
81	82	83	84	85	86	87	88	89	90
91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

終

梓舍雲寶